

2024年6月23日

説教題「キリストにある善い業」エフェソの信徒への手紙 2章 4～10 節

主任牧師 加藤 誠

「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである」(口語訳エペソ人への手紙2章14節)

今日は、79年前の沖縄戦で犠牲になった命を覚える「沖縄慰霊の日」です。約三カ月に及ぶ戦闘では20万人以上が犠牲となりました。沖縄の民間人が約10万人、日本兵が約10万人（沖縄の軍人・軍属2万8千人）、アメリカ兵が1万2500人と言われています。当時の沖縄県の人口が約50万人だそうですから、県民の約4人に一人が犠牲になった大変悲惨な地上戦であり、人々の心に癒しがたい傷を残しました。戦後、日本は「国体」を守るために沖縄を米軍に引き渡し、復帰後も本来日本全体で負うべき基地の負担をずっと沖縄に負わせ続けてきています。

今朝の巻頭言には那覇新都心教会の岡田有右先生の言葉を紹介しましたが、日本政府が沖縄の声を無視して辺野古での基地建設を強行している中で、「ミサイルよりもおむすびを」、「世界中に飢えがなくなれば平和になる。ガザの子どもたちに沖縄の黒糖を届けたい」の言葉に問われます。「わたしはどこまでガザの子どもたちの痛みにつながり、平和を求める祈りをささげることができているだろうか」と。

「沖縄は私たちの大切な『痛点』である」と言われた方がいます。「痛みを感じる」ことはとても大切なことです。もし痛点がないと、たとえば自分の体が傷つけられても何も感じることができず、気がついた時には命を落としていたということになりかねません。沖縄が実は「体全体の命を守るため」に声をあげているのに、体の他の部分が「自分の日々の暮らしには特に影響ないし、基地問題とか何だか面倒くさそうで関わりたくない」と、沖縄の「痛み」を自分の「痛み」とすることができない。「平和をつくり出す祈り」に弱い私たちの姿勢が問われているのではないのでしょうか。

今朝、岡田先生の文章に問われ思い巡らす中で、エフェソ 2章 10 節を示されました。

この 10 節は直訳では次のようになります。「事実、私たちは神の作品である。私たちは善き業に向けて、キリスト・イエスにより創造された。神は、私たちが善き業のうちに歩むよう、前もって準備して下さった」。

「私たちは神の作品である」。「作品」とは、職人が一つひとつ造り上げた作品の意味だそうです。工場で作られた画一的な製品、取り替えのきく工業製品ではない。似たようでも、一人ひとりみんな個性が違う。私たちはそれぞれに、神が愛と祈りを込めて命を与えて下さった唯一の存在である…ということです。

「神の作品である」ということは、神が「造り手」としての責任を負って下さっているということです。「神さま、どうしてわたしをこんなふうになされたのですか？」

と問いたくなることがあったとしても、神は「わたしが責任をもって、愛を込めてあなたを造った」と言われるのです。ですから私たちがどんなに不出来であったとしても、造り手である神は切り捨てないし諦めてしまわない。最後まで責任を持って全力で関わり続けてくださる。十字架のイエス・キリストがそのことを教えてくださっています。

また「神の作品である」ということは、そこには神の目的、祈りが込められているということです。神が人間を造られた目的は何でしょうか。創世記から示されることは「造り手であるわたしと喜びを分かち合い、互いに喜びを分かち合ってほしい」ということでしょう。神は破滅や悲惨のためではなく、喜びのために人間を造られた。喜びが分かち合われ、賛美が響く世界を祈って、この世界を創造されたのです。

にもかかわらず、私たちは神の思いに背を向け、喜びと賛美ではなく、破滅と悲惨に向かう歩みを続けている。そんな私たちを救うためにイエス・キリストは来てくださいました。「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし…」(4～5節)、「善き業に向けて、キリストにより創造された」(10節)のです。

この場合の「善き業」とはどのような業なのでしょう。実はキリストの十字架前は「律法が求める善き業」というものがありました。「救われるためにはこれを守らなければならない」と決められ、課せられた「善き業」です。人々は「救い」を獲得するポイントを少しでも多くゲットするために「善き業」に励みました。けれども、キリストの十字架において、そのような「救いを獲得するための善き業」は不要とされました。神の救いはすでに十字架のキリストによって私たち一人ひとりに手渡されたからです。「律法が求める善き業」に代わって「主イエスと共に歩む善き業」が示されました。例えば、第一テサロニケ5章15節で「いつも善を行うように努めなさい」と勧められている「善」とは「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」ということです。「喜び、祈り、感謝する」。神に褒めていただくため、救いを獲得するためではありません。イエス・キリストの救いに招き入れていただいたから、その大いなる恵みへの応答として、私たちは「喜び、祈り、感謝する」。これが「善き業に向けて、キリストにより創造された」の意味するところです。同じように、私たちは「神の作品」として、十字架の恵みへの応答として、キリストと共に平和をつくり出す働きに招かれています。この世界が滅びと悲惨に向かう歩みから方向転換して、喜びと安らぎを分かち合う世界となることを祈り、キリストの平和のために祈り行動するよう招かれています。戦後79年目の「沖縄慰霊の日」に「命どう宝」、一人ひとりの命をかけがえのないものとして大切にし、誰かが痛んでいるなら自分も痛み、平和を祈り続ける歩みを新たにしていきたいのです。